

第 12 回経済学史学会研究奨励賞受賞作講評

桑田 学『経済的思考の転回——世紀転換期の
統治と科学をめぐる知の系譜』

以文社, 2014 年, 277+35 頁

吉野裕介『ハイエクの経済思想——自由な社会の未来像』

勁草書房, 2014 年, vi+302+21 頁

第 12 回経済学史学会研究奨励賞の受賞作として、桑田学『経済的思考の転回——世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』と吉野裕介『ハイエクの経済思想——自由な社会の未来像』の両作品が決まった。それぞれ、経済学史研究として後の若手研究者にとって範となる高い水準を示しているだけでなく、研究者自らの考える現代的課題への取り組みも見られる意欲作といえる。

桑田学氏の著書はオットー・ノイラートの社会エネルギー論を中心に、「経済学の脱自然化」の大きな趨勢の中で忘れられた「〈経済〉なるものの存立条件を自然の物質的な相互依存関係にまで掘り下げてトータルに把握することを試みた経済思想」の系譜に光を当てようとする意欲的な作品である。また、本書は単なる忘れられた、すなわちマイナーな経済思想の掘り起しといった落穂拾いの作業にとどまらず、ノイラートとハイエクの論争の再解釈を通じて社会主義計算論争の布置についても新しい理解をもたらすなど、従来の 20 世紀経済学史像に新たな視角をもたらす可能性を秘めている。さらにノイラートの経済思想について、科学哲学から実践活動まで統一的な理解を示したことの意義は大きい。社会関係のみならず自然資源の再生産・世代間配分なども考慮に入れた、社会エネルギー論に由来するノイラートの経済思想は、現代の環境問題にも貴重な示唆を与えてくれることが期待される。

ただし、本書には以下のような課題もある。第一に、本書の動機づけで主流派の市場経済・貨幣経済についての批判を行うのに際して、論敵に対する紋切り型、断罪型の評価が目立つ。第二に、初期新古典派の理解や、ケインズとハイエクの取り扱いにおいて思想史としては粗い点がある。第三に、本書はハイエクに対してノイラートを擁護しているが、複数の主体がどう意思決定を調整（コーディネート）するかというハイエクの提起した問題に対してノイラートがどのように解答したかについては明らかにされていない。

以上のような課題はあるものの、本書からはあまり研究の進んでいない新領域を開拓しようと

する強いチャレンジ精神と、テーマの将来性・発展可能性を感じる。経済学と自然科学との関連を踏まえつつ、経済活動を不可逆の物理法則にまで掘り下げて考察する思考の系譜を真正面から扱った本書は、若い世代の会員による経済学史、社会・経済思想史研究の活発化・発展を奨励する研究奨励賞の趣旨に適う著作と考えられる。

* * *

吉野裕介氏の著作は、新たな一次文献資料を参照しつつハイエクの思想的―貫性を重視し、彼をさまざまな角度から論じた好著である。本書は、第I部と第II部における「思想史」、第III部における「思想の状況論」（本書序章の注23を参照）からなる。第I部では、著者のアーカイバル・ワークを踏まえた、伝記的事実とハイエク周辺の間人間関係も重視した綿密な検討が行われている。また、『感覚秩序』を視野に収めている点をハイエク研究として評価される。第II部では、知識の成長を軸に、進化と自生的秩序の二概念の密接不可分な関係をハイエクの中心として見出し、アメリカとヨーロッパの新自由主義概念の違いを整理しつつ、それらと対比される形で、ハイエクの自由主義思想の陰影が明確になっている。第III部は、第II部での考察を受けて、ティム・オライリーや今西錦司との比較考察を通じて、現代のオープン・ガバメント論との接続可能性という観点から、今後のハイエク思想の可能性を探っている。アーカイブ史料の利用も生きてくる部分である。オープン・ガバメント構想への評価については、議論はあろうが、「われわれが思想家から学説を学ぶ意義は、思想そのものを学ぶだけでなく、それを実践し活用することにもあるはずである。ハイエクの思想もより実践的な観点から再評価することも可能であろう」（274-75頁）という著者の意欲がもっともよくあらわれている。

ただし、本書には以下のような課題もある。第一に、ハイエクの先行研究は汗牛充棟であり、それらの諸研究の批判的吟味が必ずしも十分に詳細・緻密でなく、先行研究を文献実証的に乗り越えたかどうか、やや疑問が残る。第二に、ハイエクの思想と方法を検討した第I部では綿密な文献考証にもとづく手堅い分析が展開されているのに対して、その現代的意義について考察している第II部と第III部の議論はやや粗く、掘り下げが不足している部分が見られる。第三に、第I部の方法論ではマッハのハイエクへの影響について、もう少し進化論を中心に述べられるべきだったと思う。

以上のような課題はあるものの、全体として記述は素直で文章も読みやすく、ハイエクの思想について包括的な考察が行われている。「経済学者の思想」研究において求められる要件を十分な水準で満たしているだけでなく、著者独自の経済思想研究像を提示しようと試みている点は、積極的に評価してしかるべきであろう。

2015年5月30日

経済学史学会
学会賞審査委員会